

困窮する学生たちの現在をもたらす 新自由主義下の教育のありよう（下）

——これまでの論点整理と新たな課題——

池野重男

1. はじめに
2. 困窮する学生たちの現在をもたらす新自由主義
3. コピペの問題
4. 共感のレポート
5. 反発・反論のレポート 以上, 前号掲載済
6. ブラックバイトの問題 以下, 本号掲載
7. ケータイの問題
8. 興味・関心の問題
9. 次なる課題

6. ブラックバイトの問題

さて、学生たちからの私の情況把握に対する反発に向き合うという課題とともに、私には、もうひとつの課題がある。それは、彼ら・彼女らのアルバイト先の現場の実態についての解明である。というのは、今日では前稿で紹介したレポートにも言われている「ブラックバイト」という言葉があるほどに厳しい労働実態があり¹⁾、その実態を明らかにすることは今日の学生たちのありように少しでも近づける作業であるからでもある。おりしも昨年秋に本学生協主催の講演会「私のバイト、ブラックかも……」があり、学生たちに参加を呼びかけ、自分のアルバイト体験を検証するように、と指導をした。

そんななかに、今日の典型的な職場状況を垣間見せてくれるものがある。たとえば、あるチェーンの寿司店でのアルバイトの報告から――、

オープンしたのが2年ほど前で、自分はオープニングスタッフとして働き始めた。そこで働き続けて気になったことが、店長と社員、バイトリーダーの不在である。なぜ問題

1) 「ブラックバイト」という言葉もすっかり定着した。たとえば、2015年6月7日朝日新聞朝刊一面左トップに大きく「ブラックバイトの待遇改善 塾業界に厚労省要請」とある――「大学生らを酷使する『ブラックバイト』の問題で、厚生労働省が学習塾業界に、適正に賃金を支払うよう異例の要請をしていたことがわかった。」もっとも、「労働基準局長からの改善の要請文を、全国学習塾協会や私塾協同組合連合会など関係7団体に3月末に送った」ものの、「業界団体のなかには『会員への指導に強制力はなく対応は任意』というところもある。」という。

視しているかという、いま自分のバイト先では時間帯責任者がいるが、担っているのは年下の高校3年生であり、まだ人望があるわけでもなく、そこまで信頼もない。だからこそ、周りの空気がぬるくなり、働くことに関して怠惰になっていく。つまり、リーダーの不在が続くことによって引き起こされるモチベーションの低下である。職場の空気を引締める役割や、いざという時の頼れること、仕事についての相談などができる、しっかりとしたリーダーが必要だと感じている。

飲食店業界のブラックぶりについては有名だが、それにしても「高校3年生」を責任者に行っている企業があるのには驚かされる。そして、その下で働く大学生のモチベーションが上がらないというレポートの音がなんだか分かるような気がするの、ひとり私だけではないだろう。

もう一人のレポートも紹介しておく――

先生の論集に書いている部分がとても自分に当てはまる部分が多くて考えさせられました。ぼくの家も生活が苦しいので週6日アルバイトをしています。論集に書かれていた人たちほどではないですが、ぼくにとってはとてもしんどいです²⁾。

それに、論集にも書いていた通り大変なアルバイトばかりです。少しでも楽にお金を稼ごうと思い簡単なアルバイトを広告で探してみたものの、実際には複雑な業務のアルバイトがほとんどでした。そのうえ、「最初は気楽にアルバイトしてくれたらいいよ」と言うものの、分からない作業にオロオロしていると、キレてくるという始末でした。よけいにパニックになりながらアルバイトをするということが何回もありました。心の中では「おまえは慣れているから当たり前でできるが、オレは初めてだから分かるわけがない」と思いながら仕事をしていたこともありましたが、でも、生活費を稼がないといけないので、そういうことを経験しながらがんばらないといけないと思いました。

あと、奨学金のことについても考えさせられました。奨学金を返せない人が増加しているということを、高校に在学しているときから聞いていました。ぼくも借りているのですが、返せなくなると大変なことになるので必要最低限のお金だけを借りています。でも、将来本当に返せるのか不安になるときがあります。ぼくみたいに不安に思っている人たちが他にもたくさんいると思います。もっと、ぼくみたいに生活が苦しい家庭にも支援してくれる制度ができてほしいと思いました。

2) この学生の具体的なアルバイト状況については、別のレポートに次のようにある――「ぼくは、朝5時に起きてスーパーでアルバイトをしています。時給が1000円でよかったので、しています。冬の朝はとても寒いので、すごくしんどいです。今もまだ5時頃は寒いので、早く温かくなってほしいです。あと、最近、飲食店で働いていたのですが、3日で辞めました。時給はそんなに高くないわりには、しんどいし、店長にボロクソに怒られるからです。だから、早く良いバイトが見つかってほしいです。」

さて、多くのレポートには、やはり私の論理展開に対して反発というか、諦めが強いレポートがあった――、

弁護士平方かおる氏の講演を聞いて、非常に心当たりがあった。正直なところ、私のアルバイト先は明らかに「ブラックバイト」だと言える。残業代も出ない、休みの日に出勤させられる等、不満が絶えない。もちろん、全員がそれを自覚しているだろうが、それが当たり前ようになっていっているのが怖いと思った。様々な対策などを聞いたところで、正直なところ、実行する気にもならない。もしかしたら、私たちが環境の変化を恐れるため躊躇ってしまうのかもしれない。アルバイト環境をより良いものにするために、もっと対策を実行に移していくべきなのかもしれない。しかし、ブラックバイトの環境に慣れてしまった今、もう手遅れなのかもしれない。

私が講演を受けて感じたのは、どの例を見ても闘うことが前提で、結局会社に挑むとなるとアルバイトを辞めることになるということに対する不服である。私はブラックで有名な牛井屋のアルバイトを5年続けてきた。私が所属している店舗も店長は一応エリアマネージャーであるが、店を訪れることはほんの僅かで、アルバイト達で店を回している。色々な理不尽もあり、会社と闘った人達も僅かだが見てきた。その方々も結局は退職した。私みたいに会社への不服はあるがアルバイトは継続したい人には、モヤモヤする講演だった……自分の中に残ったものは、証拠を残しておいて、それを武器にするということだけであった。それでは、続けたいが会社にも改善してほしいと願うアルバイトにとっては、どこか腑に落ちない講演だった。……もう少し、上からも睨まれずにアルバイトを続けられるような対処法などがあれば、もっと面白味のある講演になったのではないか。アルバイトにも事情がそれぞれあるだろう。その中で理不尽なことに対抗し、アルバイトを継続できる術があるのか。ブラックといわれる会社が少しでもアルバイトに目を向けてくれることを心の底から私は願う。

この学生のように、「ブラックといわれる会社が少しでもアルバイトに目を向けてくれることを心の底から私は願う」という、じつはあり得ない——そのことは本人も分かっている——「願い」を示してレポートを終えるパターンは、ほんとうに数多い。おそらく、問題のない、ひとつの有効なレポートの書き方として教えられてきたのだろう。が、やはり、あり得ない願望で留めておくことはできない。諦めにも似た思考を前向きなものをもっていくことができるような仕掛けが可能な社会づくりが必要なのだろう。そして、それを少しでも可能にするような政治体制も模索されなければならない。そのことを分かっているからこそ、ムコウも必死なのである。最近の例では、民主党政権のあまりにもあっけない幕引きもそのひとつであった。

川村遼平・大内裕和・木村達也著／NPO 法人愛知かきつばたの会編『ブラック企業と奨学金問題——若者たちは、いま——』（ゆいぽおと発行 KTC 中央出版発売 2014年）

のなかで川村氏がそれについて、「ノーと言えない若者によるキャンペーンをどう作っていか……自分で矢面に立って会社と戦うところまで行かない人でも、参加したいと思うようなキャンペーンをどう作れるか、ということが、いま、いちばん重要になっていると思います。」(p.32)と指摘している。

じつは、現実に学生たちは動き出している。たとえば、二〇一五年二月、都留文科大学の学生たちは「都留文科大学学生ユニオン」を結成した。共同代表の藤川里恵さん自身も「アルバイト先のスーパーで、賃金を1分単位ではなく15分単位で計算され、クリスマスケーキや『恵方巻き』などの買い取り強要や、休みがとれないなどの働き方が常態化し……『おかしいと思っても、生活費をバイトに頼っていたので言い出せなかった』『労働組合という敷居が高いイメージがあるが、気軽に相談できるような活動をしたい』と話す。」(『週刊金曜日』2015年3月20日号)³⁾また、高橋「Black Against Black デモ@新宿駅前」(『情況』2015年3・4月合併号)は、「二〇〇八年ごろから全国各地に広まった『就活デモ』を前身として……若者に長時間労働・重労働を課し、前途を食いつぶす『ブラックバイト』、名前と実相が乖離し、大学卒業後の若者に著しく金銭的負担をかける『貸与型奨学金』、労働基準法などお構いなしに社員を酷使し続ける『ブラック企業』と、新卒一括採用を標榜する就活システムを含め、日本社会におけるブラックな問題……このような悪しき連鎖を断ち切るために」二〇一四年夏に結成された、「就活デモの発展拡大形であるBABL」(Black Against Black)を紹介している。

あるいは、高瀬毅「NPO法人POSSE代表 今野晴貴 日本を食いつぶす妖怪をウォッチする」(『現代の肖像』『AERA』2015年2月23日号)は、POSSEの活動にゼミ生を参加させた大学教員・佐藤がPOSSEを評価していることを紹介しながら現代若者のもつ可能性・力に言及している――

「メンバーが本当によく勉強していて、高い知的水準を保っている。専門分野だけでなく、社会全体に目を配り、伝えることにも長けているので、現場で得た知識と学問上のテキストをしっかりと結び付けて、若者に伝える言葉の力があるんです。そういう問題意識の尖った人たちと出会くと、若者はアツという間に変わります」

佐藤は、「一見おとなしく見える若者も、いまの社会に怒りを持っている。ただ、どうやって問題解決に向かっていったらいいのかわからない。POSSEは、そういう若者にとって『怒りの象徴』のような団体だ」と言う。

つまりは、若者を非難するだけの大人たちの側の問題なのだ。だから、今野氏は、あるいは、その仲間たち――「自分たちの世代は揺らぎの世代」だという――は、「終身雇用

3) こうした動きについて、対談・大内裕和×今野晴貴「ブラックバイトから考える教育の現在」(『現代思想』2015年4月号)のなかで大内氏が述べている――「二〇一三年以降、首都圏学生ユニオン、札幌学生ユニオン、関西学生アルバイトユニオン、都留文科大学学生ユニオンなど、学生ユニオンが続々と設置されています。」

が崩壊し、上の世代がつくってきた社会が制度疲労を起こしている中、若者が就職できないのは自己責任、努力が足りないからと言われてきた。そもそもは企業が非正規を広げてきたのではないかという怒りが心の奥底にある。……社会を動かしている一定の年代以上の人たちは、この国の経済はいまはだめでも、またいずれよくなり、以前のような時代が来ると思い込んでいる……だから雇用をめぐる起きている新しい問題になかなか気がつかず、問題解決に向かって社会が動かない。……自己責任で片づけられてしまうと、議論は封じ込められ、社会の問題が目隠しされてしまう。」と言うのである⁴⁾。

今野氏が言う、「自己責任で片づけられ……議論は封じ込められ、社会の問題が目隠しされてしま」っているという現状については、大内裕和・竹信三恵子「世襲なき中流階級よ、目覚めよ！——『夢よもう一度』はあり得ない」（『週刊金曜日』2014年12月19日号）が、高度成長期、つまり「戦後の格差縮小期に生きて……格差は自然に縮小に向かうと、なんとなく思っていたし、思いたがっていた」団塊の世代の「世代的経験が効いている」事態として次のように描いていて、非常に分かりやすく説得力がある——

竹信 世代間断層の向こう側の人たちには、戦前の身分制を廃して、いい学校に入ればいい暮らしができるというメリトクラシー（業績主義）が染み込んでいますからね。

大内 経済的合理主義を進めていくと寡頭支配になる現実があるにもかかわらず、頑張れば報われたという「断層前」の感覚でいるために、そのことになかなか気づけない。官僚の腐敗や税の無駄遣いについては反応できても、合理主義や市場の論理を入れることには鋭く反対できなかったのです。

竹信 もう一つは、ピケティが指摘するところの中間層が資産を持ち始め、資産の高騰による豊かさのメリットを受けてしまっていることです。

大内 世襲中流階級ですね。

竹信 60年代からは持ち家政策で小規模ながら家を持ち始め、80年代はNTT（旧電電公社）などの公的資産の民営化でその株を持ち始めるわけです。公的資産の民営化のおこぼれにあずかっているのです、それを利点と考えてしまう。

さて、本学生協主催の講演会に対しては、私の願いに応じて自分のアルバイトに真正面

4) 前掲・高瀬毅氏によると、今野氏の「ブラック企業」理解は正確に理解されていないという。今野氏によれば、「よく質問されるのは、ブラックは違法なことをしているところでしょうと。違法だからブラックとは違うんです。残業代を支払わない会社や、離職率の高い中小企業はある。だけど、それは構造的な問題があるため、従業員を安易に辞めさせたりはしない。ブラック企業は、戦略的に人を使いつぶす労務管理をしている会社のことなんです」。的確で厳しいこの指摘のゆえに、当該企業経営者たちからの「誹謗中傷」・「反発や敵も少なくない」。たとえば、2012年に出版した『ブラック企業～日本を食いつぶす妖怪』（文春新書）が翌年大佛次郎論壇賞を受賞し、同年の「新語・流行語大賞」トップテンに選ばれると同時に、ファーストリテイリングから警告文を送り付けられたり、名指しでブラック企業の実態を指摘した「ワタミ」から謝罪を要求されたりした。「でも、しっかり受けて立っていますね」（本田由紀東大教授）。

から向き合った学生たちも、もちろんのこと、いる。そうしたレポートから――

実際に私も一人暮らしをしているが、現在仕送りは無くて、すべてアルバイトで賄っている。その結果、週の大半アルバイトをしている。学業よりも生活に必要な金を稼ぐためにアルバイトを優先しなくてはならないようになっている。

あらためてこのような講演を聞いてアルバイトについて考える機会を持ち、ブラックバイトはすごく身近なところにあるものだと感じた。友人のアルバイトの話を知っていると、長時間勤務やノルマなどがあるとよく耳にする。私も改めて考えてみると、バイトにしては責任が重い仕事をさせられているのかも、と感じた。

現在では、このようなことが当たり前になりつつあり、こうやって改めて考えないとブラックバイトだと気づかなくなっているかもしれない。今の社会の風向きが悪く、当たり前になりつつあるこの環境を変えることは、大変難しいことだと思った。

こうした理解を獲得してもらえることがあるから、私も教育なるものの醍醐味を感じることができ、また一步を進めようとも思えるのである。そして、その際に重要なのは、どんな教育なのかの検証である。

たとえば、古田真梨子「静かに広がる子どもの貧困――格差、貧困が拡大 『現場発!』アベノ残酷物語第5弾」(『週刊朝日』2015年3月6日号)は、日本の貧困に「ピンとこない人」が多い理由について、「とりあえず服を着ているし、義務教育だから学校にも通っている。雨風をしのげる家もある。だから現実感が乏しい」とか、「我々日本人は『一億総中流』であることを誇りに思ってきた。豊かな国であるという先入観、幻想を手放したくないから確実に増えている『貧困』に向き合ってこなかった。周囲に大卒の友人しかいない、誰もが就職して正社員として働いているのが当たり前だという人も多い。でも、それが隔絶された狭い世界であることを知らないのです」といった意見、あるいは、「忘れ物をしたり、遅刻を繰り返したりする子どもがいる場合、教師は『前日に準備しなさい』『きちんと起きなさい』と生活指導をするのが常だ。『実は母親が一日中働いていて、朝は起こしてくれないのかもしれない。忘れ物も、文房具を買えないのかもしれない。校外学習に行きたくない嫌がる生徒も、実は参加費の数百円が用意できないのかもしれない。多くの教師がそこまで思いが至らず、「ちょっと困った子」ということで終わってしまう』という学校現場の問題を紹介している。問題の根源を見つめる思考・視点を生み出す教育こそが、私たちには求められているのである。

7. ケータイの問題

さて、もちろんのこと、アルバイトで忙しいからといってコピペが正当化されるわけではない。学生としての学びが疎かになっていることについて、アルバイト労働に割くための余裕のなさ以外にいったいどんな問題がそこにはあるのか。それについて、私は、もうひとつの論稿「興味・関心の問題と社会のありよう」(本誌第65巻第4号 2014年11月)

で解明しようと試みた。

じつは、学生たちの「興味・関心の問題」を考えるきっかけになったのは、私の教員としての強烈な、というか困惑する体験に基づいている。高校への模擬授業では経済学の考え方を体験してもらおう。そのために A3 用紙を各生徒に配布して世界地図を書いてもらって大航海時代の航路を描いてもらったりするのだが、ある高校でのこと、ひとりの生徒がけっして課題に取り組もうとはしなかった。やりたくないとは決して口にしないのだが、言を左右にやろうとしない。外部から一回限りの授業にやってきた私は、当該生徒についてなんら情報を持っていない。だからといって、その一人だけを無視して授業を進行することなどできないので、どうしてやらないのか、と迫るしかなかった。すると、オレ、出ていくぞ！ と脅しにかかってきた。どうやらいわゆるワルらしく、他の生徒に自分についてくるようにとの仕草も盛んに行なった。ここでたじろぐわけにもいかない私は、君がやる気がないのなら教室から出ていくのを私は止めはしない、と言うしかなかった。そのやりとりで結局彼一人が退室することになり、そのまま授業を進めることになったのだが、妙に心に引っかかった（ここで彼に続いて多くの生徒が退室してしまったらどうだったろうかとか、授業後に校長や学年主任が「とんだ不始末でご迷惑をかけたようで……」と謝りにきたとか、そんなレベルではなく、もっと本質的なこととして）。

これと全く同じ事態が私の保険論でも起こったのである。さすがに本学の学生には訪問した高校先でのように A3 用紙こそ配布しないが⁵⁾、一人の学生が課題に取り組もうとしなかった。どうしてやらないのか？ と問う私に彼は答えた——「興味ないもん」。私は、そうですか、と引き下がるわけにもいかず、興味がないのにどうして出席しているの？ と迫るが、彼は膨れっ面するだけで事態は変わらない。教員という権力性で鉛筆を持たせて課題に取り組ませたが、ここで先の高校での苦い体験の思い出が蘇った。

興味・関心の問題については、まことに厳しい、次のようなレポートがあった——

言われてみれば、確かに世の中への興味・関心といったものを持つことがあまりないような気もしてきます。でも、それを悪いことだとはあまり思わないし、社会に出ている多くの方が実際に世の中への興味・関心がなかったりするのだから、悪いと思う必要もないと思います。

う～ん、そう居直られてしまうと、大人たちの問題として立て直していくしかない（そして、そのようにこれまでの諸論稿で私は展開してきた）のだが、でも、そう簡単に居直らないで、まずは自分の足元も見てほしい。

それにしても、今日の学生たちの消費者意識の強さは途轍もない。これは、これまでの大学「改革」の狙いの結果であるのだが、だからといって、そのこと自体の見直しという

5) 私の講義に——ということは、他の講義においても同じなのだろう——ノートも鉛筆も持ってこない学生がいる。これは何なのだろう。私は啞然するだけなのだが、当人にとっては何ら問題はないようなのである。私が注意しても次の週もやはりノートも鉛筆も持って来ることはない。

か在那里への疑いくらいは持ってもらいたい。たとえば、私の保険論講義で、学生たちが日常的に直面するリスクとそれに対応した保険商品をグループごとに話し合いをして発表してもらったが、そのなかの「こんな保険があればうれしいのだが……」というテーマにおいて、「電車が満員であっても必ず座れる保険」や「授業が休校になった際に授業料が戻ってくる保険」、つまり、「公欠時授業料返還保険」とか「休講時授業料返還保険」があった。これなどは見事に消費者意識の強さを浮き彫りにしている。より具体的に分かってもらうために、あるクラスからのレポートを紹介してみる⁶⁾——

今回のテーマは今までで一番おもしろかったです。別の班で出ていた「電車が満員であっても必ず座れる保険」や「授業が休校になった際に授業料が戻ってくる保険」には同感しました。

まず電車についてですが、我々は電車賃を出して電車に乗っています。ですから、座らせてもらうのが当然だと思います。鉄道機関は我々のお金によって成り立っているわけですし、我々もその気になれば車や飛行機などの手段を使うこともできるわけです。その様々な交通手段の中からわざわざ電車を選んでいるのですから、もっと我々にも快適な場を作るべきなのではないでしょうか。しかし、現実的に厳しい話なのは百も承知です。そこで、保険会社が別にその対処方法を考えてくださるのも手だと思いました。世の中すべて金で解決する気がします。

授業が休講になった際の授業料返還制度もいいと思います。だいたい一回の授業につき約5000～8000円払っているうえに、我々のスケジュールを変更させて、かつ別の日に

6) 学生たちには当日の講義の概要・まとめと感想を提出してもらっているのので、それを紹介することで私のその日の講義の様子を推測してもらいたい——

●六月四日講義の振り返り 前回の講義において、資本にかかるリスクや人にかかるリスクについて学び、意見の出し合いはグループワークで行なった。資本と人それぞれにかかってくるリスクの違いは規模があるとグループ内でまとまった。資本のリスクはおおよそ企業・集団のリスクと考えることができ、具体的には資本が天災や人災によって害されるリスクや外貨変動などの経済的なリスクが大半を占めた。一方、人へのリスクは個人へのリスクととることができ、ケガや病気の身体的リスク、失業や生活費の変動の経済的リスクとなり、加えて離婚や他者の死去のような精神的リスクのような意見も出た。その中でも結婚もリスクではないかという議論はとても印象深かった。続いて、それらのリスクに対しての保険を考え、世間にはない理想の保険についても意見を出し合うグループワークへと移った。が、議論はすぐに終わり、全員一致で考えた、落とした授業単位に対しての保険が頭から離れなかった。

グループワークでの意見の出し合いの後、先生の解説が入った。保険とは人間の意思に関係なく起きてしまった事象に対してかかるものであり、授業単位を落とすような意思の含まれる行動には保険は発生しないので、あるとすれば授業が急に休講になった場合の保険に限られるのである。

●感想 現在、世の中のものごとのほとんどに保険が存在する背景に“人の意思が作用していない”という前提があることを知らなかった自分には、ギャンブル保険や離婚保険が存在しえない理由がとて理にかなったものとして入ってきた。

補講するなど、おかしな話だと思います。たった一人の教授に多くの人の時間を狂わせる権利などないと思います。生徒に授業には来いとか課題をして来いと指示するくらいの発言をしているのなら、自分の立場を考えて責任を負うべきです。そうはいつでも、多くの生徒に対して責任を持つことはなかなかしんどいことだと思います。そこに保険制度を設けることで、私たちにも教授にもメリットがあるのではないのでしょうか。

学生たちの消費者意識については、私はこれまで、私も加わっていた「変貌する大学」シリーズ全5巻（社会評論社 1994年～2000年）や、私の「規制緩和のなかの大学『改革』」（本誌第47巻第4号 1996年11月）とか「大学『改革』の現在」（同第48巻第6号 1998年3月）などで詳しく展開している。そして、これに当惑しているのは、じつは私だけではないようで、多くの教員がやはりこの問題に実際に直面している。たとえば、文化学園大学で教えている、一九七七年生まれという若い白井氏も次のように語っている⁷⁾――

大学で教えていて一番の実感は、「消費者主義の泥沼は底なしだ」ということです。アルバイト負担が重い学生は増えていて、「ブラックバイト」のように労働の現場で何かを経験しているにもかかわらず、批判的思考を獲得できない。消費者意識によって回路がおかしくなっているのか、まともな感性も、まともな思考も、従ってまともな階級意識も生じようがない。所与となっている消費社会の分厚い壁をどうやって打ち破れるのか。

今日の学生たちが持つ、こうした強烈な消費者としての権利意識のメダルの裏側にあるものは、時代迎合＝政治的無関心である。じつは、これについては第3節（本誌前号）で言及しているのだが、消費者意識と絡めて重要な点なので、ここで、中西新太郎「貧困と

7) これまで私は、「助け合いの職場・社会を求めて――九カ月で証券会社を辞めた卒業生と学生たち」（本誌第58巻第5号 2007年11月）や、「リスク社会を超えて――現状肯定の発想を克服する」（同第63巻第2号 2012年7月）、さらには、「脱リスク社会への挑戦」（同第63巻第5号 2013年1月）などで、これからの社会の模索の実践を紹介したり考察してきたが、白井氏は、この対談（平井玄・白井聡「資本主義の“外部”を生きるために」『週刊金曜日』2014年12月19日号）で今後の社会のありようを考えていてなかなか興味深い。本文の引用に続く一部を紹介しておく――

白井 最近本当に思うのは、私たちは資本主義の“外部”を、つねに、すでに生きているはずなんですよ。[デヴィッド・] グレーバー [ロンドン大学准教授] が例に出すのは、会社のなかで「ちょっとそれ取って」と頼んで「あいよ」と言って取る。そういうときに見返りを求めるかと言えば求めない。資本主義的に厳密に言えば、つねに等価交換でなくてはいけないから、「取ってあげる代わりに、おまえは俺に何をしてくれるのか」とならなければ正しくないわけですが、そんなことにはならない。どんなに資本主義の最先端をいっている企業のなかでも、実は労働の現場、あるいは日常的なコミュニケーションにおいては、すでにコミュニズムを生きているのではないかと。そうした、つねに、すでに触れている“外部”を、どのように生き生きとしたイメージとして語れるか、広げられるかです。

孤立のスパイラルを断ち切る」(『現代思想』2015年4月号)の指摘を掲げて確認しておきたい——「企業社会の秩序にそくして振る舞えるよう求める職業的社会化にあっては、政治的関心を持たずに生きることの『陶冶』が迫られる。政治的関心を持たぬこと(見せぬこと)が、社会生活を大過なく過ごす処世術となる『非政治化の政治』が支配したのである。若者の政治的無関心という『常識』は、政治的社会的この特異な様相を若者意識の側に置き換える転倒した認識にすぎない。」

さて、追い打ちをかける事態があった。私は、私の講義では学生たちには携帯電話などは電源を切ってカバンに仕舞うように求めているのだが、それでも講義中もやはりケータイを学生たちは手放せないのである。講義の最初にケータイの電源をオフにして各自カバンに仕舞っているか——ズボンなどのポケットなどに仕舞うと触ってしまうので必ずカバンなどに仕舞うようにと強調する——を出席者全員に確認するようにと指導するのだが、それに対してやはり不服のようである。この間まで高校生であった、一回生——昨年度の一回生にたまたま訊いたのだが、彼ら・彼女らは「ネズミ年生まれ」だという。なんと私と四回り違うのである！——対象の講義「現代経営入門Ⅰ」で出されたレポートに、それについて書かれたところがある——

私は携帯電話を必ずオフにしてカバンにしまうことについて常識だとは思いますが、完全に納得がいているという訳ではない。なぜなら、それは緊急連絡だとか大切な用事があったりするかもしれないからである。そのように考えるのは、そもそも携帯電話とは家にある固定電話とは勝手が違い、いつでもどこでも持ち歩き、「便利」というのが一番のメリットであるからである。いつどんな時でも自分自身の身に付けていることで急な用事やトラブルにもすぐ対応できる。また、今では小学生から持っている子どもも多く、防犯としてでも使えるからである。

だからといって、掴み放さず持っとけばいいという訳ではない。場や状況を考えて正しくルールを守って使用するべきなのであると考える。

しかし、私が大学に入り一番驚いたことがある。それは、授業中に携帯を触っている生徒がいるということだ。高校までは携帯自身の持ち込みが禁止されていたのでこんなことはなかったが、大学ではごく普通に行われている光景であった。

私自身たまに触りたくなるが、常識として、マナーとして心がけて今後の授業も意欲的に積極的に取り組みたいと考えている。

講義を受ける時は携帯電話をオフにしないといけないことは分かっているながらも、オフにすることはあまりありません。私もそうだし、友達や周りの人を見ていると、そう感じます。私自身いつもしているのはマナーモードです。でも、マナーモードでも講義中にメールが来たら分かってしまうので、気になってしまうのは確かです。最近の若者はすぐにメールの返事を出さないと友達ができないという風潮があるらしいのですが、私自身それを感じたことはありません。それでも、電源をオフにせずマナーモードにす

るのは、すぐに返事をしなくともメールが来ているかどうかは知りたい。携帯電話がすぐに使える状態でないと嫌だ、という気持ちが自分にもあるからだと考えました。

電車の中でも優先座席で携帯電話をオフにしている人をよく見かけます。ほとんどの人が携帯を使っています。私も気をつけようと思うのですが、ついつい見てしまいます。ペースメーカーをつけている・いないは見かけでは分からないし、今の状態のままだとペースメーカーをつけている人が安心して電車に乗れることはなさそうです。少しずつ携帯と離れる時間を増やしていくことから始めようと思います。

おそらく大学生にあっては比較的真面目なほうであろう一回生のケータイ論議であるから、これらはまだまだ私に対してかなり遠慮がちである。しかし、以下に示すように、三・四回生対象の講義「保険論Ⅰ・Ⅱ」で講義中にケータイを操作していて私に注意された学生たちから出されたレポートは、そうした遠慮は一切ない。とにかく謝ればそれでいいだろうという無内容のレポートから、あの時はやむを得なかったのだという言い訳、あるいは、ケータイについての都合のいい理論付けまで、と本当に何でもあり、である。以下、そうしたレポートのいくつかを示してみる――

私は前回の講義中にケータイをいじってしまいました。先生が講義の最中にはケータイをいじるなどと言っていたのにいじってしまいました。大変申し訳ないと思っています。今後このようなことがないようにします。すみませんでした。

授業中にスマホを触っていたことについて。映画を見るということで「それならばいいか」という気持ちがあり触ってしまいました。今後授業中にそのようなことをしないと約束します。すみませんでした。

授業で携帯を触っていたのですが、シラバスに書いてあるにもかかわらず触ってしまったのは、私は現在就活中なのですが、企業の方から携帯に連絡がくることがあるのですが、あの時は企業の方から連絡があるかもしれないと思い、後で見ればよかったのですが、気になってしまい携帯を見てしまいました。いかなる理由があるにせよ、ルールを知らながら携帯を触ってしまった私に非があります。申し訳ありませんでした。

保険論では授業中のスマートフォンの使用を禁止していますが、私が今期受けている別の講義では先生自身がスマートフォンの使用を勧めています。というのも、たとえば友達で講義を受けていて小声で少し話をする、または後ろに座っている友達に振り返ってまで話をしている生徒がいたら、講義中にも関わらずスマートフォンの使用を促します。最近のスマートフォンではLINEという便利なアプリがあります。友達個人、または複数の友人とグループを作ってチャット形式で会話ができるというものです。その先生、小声で話すのであればLINEを使って会話してください、と言うのです。私は

この言葉を聞いたとき衝撃を受けました。これまでの保険論以外の講義でも携帯電話や私語禁止という講義が多々ありました。大概そのような講義は板書が多すぎてスマートフォンをいじる暇もないのですが、本来なら講義を受けに学校に来た生徒に講義を行うのが先生であり、少しでも講義に興味を持ってもらいたいと先生方は思っているだろうと思っていました。ですが、どうやらこの先生はそうではないようです。確かに、スマートフォンは音が鳴らない分、小声で話されるよりは講義自体の妨げにはならないようです。しかし、生徒は授業ではなくスマートフォンに集中してしまうと思うのです。保険論のようにまったくスマートフォンを使っってはいけないと言われるのと、あえてスマートフォンの使用を勧められる講義、どちらが良くてどちらが悪いとは言えません。ですが、生徒もみんながみんなメールやLINEをしているわけではなく、授業で気になったことなどをその場で調べるためにもスマートフォンを使用する場合があることを知っていただきたいです。

スマートフォンと我々の密接な関係

今日ではスマートフォン（以下スマホ）は私たちの生活に不可欠な物になっていると感じます。電車に乗ると大半は片手に携帯電話を持ち釘づけ状態であり、情報検索や外部との連絡を24時間体制で行っています。「歩きスマホ」という造語も作られ、その操作の危険を警告するため日々注意が促されています。先日、先生が授業中に携帯をいじるな！と生徒に注意したら逆切れされたとのことをお話をお伺いし、携帯電話について様々な視点から考えました。携帯電話は10年前と比べると急速に普及しており、誰もが持っている当然のものです。これのメリット、デメリットを考察しました。メリットはスマホ1つで会社経営ができる時代になり、ライブドアの堀江貴文さんはこの機械1つで生活しているようです。大学生の就職活動も多くの攻略本が出版されるほど激化を増し、今やスピード重視の時代にスマホなしに内定獲得は難しくなっていると考えます。それ程便利な物だと思えます。しかし、デメリットと言えば、オフライン環境がなくなり、自分の時間が取りにくくなることは間違いないです。友達や仕事関係の連絡が24時間可能なので、1日でも返信を延ばせば相手にとっては無視されていると捉えられる心配が出てきます。最近ではLINEの人気で特に小規模の複数のコミュニティで溢れており、学生の間ではいじめの原因として問題が浮上しています。

問題の授業中にスマホをいじってしまう生徒ですが、やはり原則は講義中であれば真面目に先生の話聞くべきだと思います。身内の危篤状態や止むを得ない状況以外はやはり携帯を放置し、自ら選択して履修する講義に集中すべきです。ただ一つ問題提起するとすれば、「授業が面白くない」場合もあるということです。個人的には授業の中には専門用語を豊富に使う先生もおり、自身の知識不足で上の空になる場合もあります。大学の講義は人生において多分野の入門にあたる講義だと定義づけていますので、知識のないのは当然です。その授業を踏まえてどう感じたか、これからどう行動するかだ、と考えます。どんな分野でも深く追求すれば面白いと思うので、最初の段階でどれだけ

その授業の魅力を学生に分かるように伝えるか、その掴みが先生にとって挑戦すべき課題なのではないか、と感じます。

スマホ・タブレット端末の利用制限について

- ・ 禁止を促すが、教師は利用するの？
- ・ 多機能のために必要なツールでは？

以上、単なる口だけの謝罪から理論付けまで様々である。重要なことは、こうした学生たちのレポートの背後にあるのは、いまやケータイ容認は多数派であるという驕り、安心感である、という点である。そして、すべてがそこからの理屈でしかない。先に結論があるのだから、しかもその結論たるや多数派なのであり何ら遠慮する必要もないのであるから、その理屈なんて貨車いっばいに何とでも言うことができるのである。

上のレポートの最後から二つ目の「スマートフォンと我々の密接な関係」というタイトルを冠したそれは、「原則は講義中であれば真面目に先生の話聞くべきだと思います。身内の危篤状態や止むを得ない状況以外はやはり携帯を放置し、自ら選択して履修する講義に集中すべきです」と一見正当な論理のように見えるが、「身内の危篤状態や止むを得ない状況」を密かに例外として潜り込ませていて、せっかくの「原則」を曖昧にしている。「原則」というのはじつはもっと厳格なものであり、「身内の危篤状態や止むを得ない状況」をも含み込むものである。「身内の危篤状態や止むを得ない状況」をも排してせっかく講義に出てきているのだとしたら、だからこそ、ケータイをオフにして臨むことになるのではないのか。選択の問題である。

もっとも、最近では就職絡みでの居直りがあると、宮南洋『『キャリア教育』による攻撃に直面する大学』（『情況』2015年3・4月合併号）が指摘している――

[就職の] 選考過程にある学生は、いつ鳴るともわからない携帯電話を握り締めながら、授業に出席しなければならない。一度でも電話に出そびれば、選考過程から脱落してしまうなどという話はいわば「常識」である。学生は、授業の途中でも、電話が鳴れば即座に講堂から外に出る。そして、講堂に戻れば履歴書を書き始める。

就職率の良さを売りにする大学は「キャリア教育」に熱心であり、それゆえに、学生たちも煽られて、あるいは、自ら進んで就職活動に励むのだから、上のような風景が容易に私にも想像ができる（現に、上のレポートの三つ目のそれが就職活動に絡んでのものである）。私がそうした場面に直面したとしたら、つまり、企業からの連絡待ちなので電源を切れないのですと学生が言い募ったとしたら、いったいどういう対応をとることができるだろうか。あくまで講義中の携帯電話オフという原則を徹底し、企業からの連絡待ちにもかかわらず講義に出ているのならルールに従う必要はあるだろうと言いながら、それとは別に、そんな就職活動というものを一緒に考えるしか他には道はないのであろう。

なお、就職活動に関連して、宮南洋氏によれば、経済同友会副代表の富山和彦氏が「昨年の一〇月……文科省の有識者会議に招聘され、提言を行った。富山は会議の中で『従来の文系学部はほとんど不要』『文学部の教授はほとんど辞めてもらう』などと明記した資料を配布した。……『労働生産力の効率的な育成』という観点から従来の大学のあり方を批判し、その再編を迫って」次のように強調したという——「あらゆる高等教育機関（東大とて学部と学生レベルによっては例外ではない）が、『職業訓練』に異次元レベルで注力することで、社会全体の生産性・効率性（≒賃金と安定雇用）を改善する。」で、その「異次元レベル」の職業教育とは、「『シェイクスピア』や『憲法』の授業を、『観光業で必要となる英語』や『道路交通法』『大型第二種免許』を習得するカリキュラムへと再編していく」こと、つまりは、「大学における授業カリキュラムは……『生産性向上に資するスキル保持者の排出（職業訓練）』へと転換されるべきであるのだという。」

さらには、川村雅則「若者労働の現状と、労働教育の模索」（『現代思想』2015年4月号）は、大学のキャリア教育に関わっての社会的責任を指摘する——

教育現場でも、労働市場の構造変化やわが国の労働市場の特殊性を抜きに、「適職さがし」「自己分析」が繰り返し唱えられ、「正規と非正規の間の大きな賃金格差」や「新卒採用を逃せば圧倒的な不利」を脅迫材料に就職意識の強化などが図られている。労使関係の視点も希薄である。雇用の現状は所与の条件とされ、入学時からの用意周到な準備が促される。日頃、批判的かつ多面的に物事を捉えるよう学生に指導する大学でも、そうした実態である。

むろん、それが善意からの対応であることに疑いの余地はないのだが、ただ結果として、内定獲得の失敗やブラック企業への就職さえも自己責任という文脈でとらえられかねないことが危惧される。

さらに懸念されるのは、就職支援の主体である大学側が確固たる理念も持たずに就職率の向上に邁進し、講師や教材作成を民間事業者に丸投げすることで、例えば、労働条件を企業に聞くのはタブーとするなど、明らかに有害なキャリア教育もみられることだ。ブラック企業問題に教育機関が加担しているのではないか、という厳しい指摘を真剣に受け止める必要がある。

こうした事情もあって、携帯電話においても一層の居丈高な姿勢が正当化される。そして、学生たちはこうした多数派に無批判に安住しているからこそ、とりわけ映像を流した講義においては闇の中に蛍が飛んでいるような明かりが飛び交う。そのたびに私は教室内を回って無言で注意するのだが、多勢に無勢である。講義後にたまたまゼミ生でもあったひとりの女子学生に問うた——「どうして携帯を出していたのか？」と。彼女は、「だって、講義の映像のテーマにはワタシ全然興味がないもん」と、あっけらかんと答えたのだった。また、まったく別の機会に注意した男子学生の場合は、彼を途中で廊下に呼び出して、「なぜいま私が君を呼び出したか分かるよね？」と注意したのだが、しらばくれ通してそ

のまま帰っていった。

こうした、なんら悪気のないようにも見える、彼ら彼女らの態度を私は教員としてどう理解すればいいのか、という突きつけが私のなかに残っていたのである。そうした背景があって、先の論稿「興味・関心の問題と社会のありよう」へと私は至ったのであった。そして、そこから出てきたものは、学生たちのものの考え方の問題であり、そして、そんな学生たちの生きる時代を作り上げてきた私たち大人の側の問題である。

いまという時代について、「電気の地産地消」を実践する株式会社きとうむらが発行する「きとうむら通信」の巻頭言「希望と夢と優しさ」（ひのゆうさく）は、その厳しさを次のように指摘している——「日本の自殺者と変死者（その多くが自殺と考えられる）は年間十八万人、行方不明者が十五万人で、毎年三十万人を越す人々が、生活の現場から姿を消しています。まさに戦争状態と言っても過言ではありません。これが、私たちの求める幸せで平和な社会とは、とうてい思えません。」そんな時代を私たち大人が作ってしまったのであり、だからこそ、若い人たちがしんどいのである。

そこで、時代を突破する力が求められているのであり、そのために学生たちの考え方の問題と同時に、私たち大人が問われるのである。

ところで、携帯電話やスマホに関して、私の教育方針に対立する二つの報告記事を目にした——ソーイ・シュランガー／佐伯直美『『スマホ絶ち』で成績がガタ落ちに？——携帯電話 iPhone が手元にないと仕事や成績にも影響するという新研究』（『Newsweek』2015年2月10日号）と、「学生スマホ 授業で活用 投票・意見、スクリーンに次々 集中力高め 参加促す」（朝日新聞2015年5月30日）である。

前者は、「スマートフォンや携帯電話を授業や会議に持って行くと、ついいじったりして集中できなくなるから禁止すべき——よく耳にする主張だが、実際はむしろ逆効果かもしれない」という研究発表の紹介である。つまり、「スマホが手の届く場所がないとユーザーの不安やストレスが高まる」・「精神面だけでなく認知能力まで阻害され、成績や仕事ぶりにも悪影響を及ぼす恐れがある」と。研究の中心メンバーの一人によると、「iPhoneは私たち人間の一部になる力を持っている。だから、近くにないと自分の中の何かが欠けているような感覚に陥り、肉体にもネガティブな影響を及ぼす」という。そこで、研究チームの示す解決策というのは、「1日のうちスマホを気にしない時間を作りつつ、試験や重要な会議など高い集中力を要する場には持っていくこと」というのである。

後者は、「大学の大使室で、学生の私有スマートフォンを使った授業が増えている。学生がスマホに書き込んだ意見を、その場でスクリーンに映し出したり、教員がコメントしたり、学生の興味を引きつけるのが難しい大人数授業で、双方向性を出そうという試みだ。」「大使室の授業では学生が発言しにくく、集中力も下がりやすい。そこで……ネットサービス会社……が開発したサイト……を使う」ことで「講師と参加者が双方向でやりとり」ができ、「学生が授業に『参加』しやすい」というのである。これを使っている教員の話では、「『学生の集中力が高まって授業が盛り上がるようになった』と感じている。……授業に集中できている時間帯が以前の約20分から倍に伸びたという。』

いずれもメリットがあるのだからそれでいいではないか、という受けとめ方があるだろう。そして、だからこそ、こうした報道がなされるのである。しかし、いずれもコトの問題の本質に触れずに対処しているだけである。たとえば、「1日のうちスマホを気にしない時間を作りつつ、試験や重要な会議など高い集中力を要する場には持っていく」という前者の対処は、いったいそんなことが可能なのか。「iPhone は私たち人間の一部になる力を持っている。だから、近くにないと自分の中の何かが欠けているような感覚に陥り、肉体にもネガティブな影響を及ぼす」という事態そのものを前提にしたままで、「1日のうちスマホを気にしない時間を作」ることが可能であろうか。少なくとも私には、そんなことは不可能だとしか思えない。また、後者についても、現在の技術のありようそのものをどう考えるかが、まず先に大学で学ぶことであろう。もっとも、すべてを与件としてしまうのではなくより根源的に与件そのものを疑う考えが出て来るような学問・大学のありようこそを廃止したいというのが、政府・経済界なのである。だからこそ、先に示したような経済同友会副代表の富山和彦氏の提言が臆面もなく披露されるのである⁸⁾。

8. 興味・関心の問題

学生の問題として終わらせずに、それを大人の側の問題として捉えようと、私は、書評「編集室ふたりから&ひとり九条の会（編集・発行 金住典子／編集協力 原田奈翁雄）『ひとりから——対等なまなざしの世界をめざして』第55号（2014年6月）」（本誌第65巻第4号 2014年11月）で、主として内山節氏と本田由紀氏の主張を借りながら論じた。なお、この後、内山氏は「現代日本の閉塞をつきくずす『地方』の価値と力」（『世界』2015年5月号）において、「農山漁村や地方都市の人たちを大都市圏や工業地帯が吸収しながら展開した」「高度成長期の発想が抜けない」人たちが今日において叫ぶ「地方創生」のまやかしを鋭く衝きながら、新しく「戦後の超克を内包するローカリズム」を説いている——「個人主義的な自己防衛と自己実現をめざし、しかし現実には、市場経済や国家のもとに吸収されながら出口を失った戦中、戦後という連続した時代とは異なる新しい生き方の時代を切り開く可能性が、ここには芽生えている……そういう動きをふくめて日本の

8) いまの学生たちに前者の報告をどう読むかを聞いたところしっかりと反論する者もいて心強かったのだが、だからこそ今日にあって、こうした反論をするような学生たちを生む地盤を根こそぎにしたいという経済界の思いが強いのだろう。学生たちの具体的な反論は別の機会に紹介したい。

9) 「いまでも高度成長期世代の人たちに会うと、『自分は田舎から出てきたけれど、田舎は縛りが多く自由がなかった』という人たちがいる。／しかし私は、そういう話を聞いたたびに不思議な気持ちになってくる。私は東京と群馬県の山村、上野村を行ったり来たりする二重生活を四〇年余りつづけてきたけれど、共同体的な社会ではお互いがよく知り合っていることも、村には村の流儀があることも確かだ。その意味では勝手を振る舞いはみんなに嫌がられる。もっとも、私にとってはよく知り合っていることは安心感につながるし、村の流儀もなぜそれが定着しているのかを知れば、理由のあるものだということがわかってきて、むしろ居心地のよいものなのだが、そういう社会のあり方に反発を覚える人がいたとしても、それは個人の価値判断の自由である。／私が不思議に思うのは、それに反発した人たちが、なぜ長期にわたって企業に縛られることには耐えられるのかである。」

社会をつくりかえていくこと、それが今日の私たちの課題である。」

ところで、「地方創生」という今日の流行のスローガンの空虚さを衝くものとして、次のような内山氏の指摘は、考え方のありようとして大いに学ぶところがあるだろう。いささか長い引用となるが、考え方の面白さ・楽しさを堪能してほしい――

戦後の、とりわけ高度成長期以降の精神と社会の関係のなかでは、都市は文明の先進地であり、田舎は遅れた地域であった。都市は自由な街であり、田舎はさまざましがらみに縛られた地域であった。そういうものとして感じられる神話の世界に、多くの人々が存在していたのである。

「地方創生」という言葉から感じとられるものも、このような神話の世界である。東京などの大都市はうまくいっているが地方は問題が多い、そういう前提的な思い込みがなかったなら、こんな言葉は生まれまいだろう。だがそれはいまの現実を正しくとらえていない。

たとえば、全国で一番出生率の低いのは東京である。それは……東京がもっとも家庭生活も子育てもしにくい地域だからである。確かに、地方都市には店を閉めたシャッター街が数多く生まれている。だがそれは店を閉めても生活していけるからであり、そういうゆとりが地方都市にはあると考えた方がいい。店を閉めたら暮らしが破綻するなら、彼らも必死になって店を維持しようとするだろう。実際、今日の農山漁村にいくと、シングルマザーの多いことに驚かされる。……子どもを連れて実家に戻ってきたケースが多いが、現在では都市よりも農山漁村の方が、シングルマザーの暮らしやすい地域になっているのである。もちろん、高齢者にとっても都市よりも田舎の方が暮らしやすいだろう。そこでは何歳になっても自分の仕事をもちつづけ、地域社会の一員でいることができる。

そんなことを挙げていったら切りがないが、はっきりしていることは、戦後的な神話はもはや成立していないということである。……次のような反論は受けるかもしれない。それは今日の農山村では休耕地が目立ち、過疎化や高齢化もすすんでいるのではないかという反論である。

確かにそのとおりだ。だが、その理由もまた休耕地にしても暮らしていけるからであり、高齢者にとっては暮らしやすいからである。また過疎化といっても、その意味は東京の人たちが考えているものとは違う。東京の人々は、社会は生きている人間だけによって創られていると思っているかもしれないが、伝統的な社会観では、社会とは自然と人間を支え、亡くなった人々の残していったものが、いまの暮らしを支えている。人々はそういう社会観のなかで暮らしてきたのであり、つまり生者の数は減少しても、自然や亡くなった先輩たちは減少してはいないのである。社会は生きている人間だけでつくられているという欧米的な社会観だけがすべてではない。もちろん、人口は減少してもよいということではないが、人口減少イコール社会崩壊ではない。だからこそ、過疎化した集落でも人間たちは暮らしていけるのである。

さて、今日は時代を突破する力が求められているのであり、そのために学生たちの考え方の問題と同時に、私たち大人が問われるのである。その考えから、先の書評では後者を論じたのだが、私の論稿「学生たちの歴史認識を読む——DVD『戦争』案内（企画・制作 映像文化協会 2006年）と明治政府の富国強兵政策」（同 第65巻第5号 2015年1月）では、先の論点のうちの前者を正面から論じた。

そして、この二つの論点を考えるにあたって文学というものの持つ力を使えないかと考えて、書評「中国が読める現代中国小説①」（同上 第65巻第6号 2015年3月）を書いた。学生をはじめとする若者の右傾化が言われるものの、じつは中高年のそれがいまの時代のそれを牽引しているという分析があり、その嫌韓・嫌中ブームのなかで文学が隣国の実態を知るきっかけになるのではないか、という思いからである。

池上彰／トマ・ピケティ特別対談「本当に伝えたかったことは何ですか」（『週刊ダイヤモンド』2015年2月14日号）のなかに次のようなやり取りがあるが、私が先の書評に取り組んだ意図を説得力をもって語っているので紹介しておきたい——

池上 本の中ではオノレ・ド・バルザックなどの文学作品を多く引用しています。これもマルクスと似ていますが、若いころから文学に傾倒していたのですか。

ピケティ ええ。高校生のときからかなりいろいろな作品を読んできました。文学は、私にとって大事な情報源です。その時代に生きた人々の身に何が起こっていたのかが分かるからです。特にマネーは人生に大きな影響を及ぼします。それも生々しく、です。文学は時代を読み解く上でとても重要ですね。

例えば、最近に読んだメキシコ人作家のカルロス・フェンテスの本は、メキシコ革命が人々に与えた影響がよく表現されています。

文学には経済学的な美しさはありませんが、社会科学と補完的な関係があります。社会科学の最先端にあるといってもよい力強さがありますね。

私がいま前掲書評に続いて準備しているのが、朱曉平『縛られた村』（杉本達夫訳「新しい中国文学」第6巻 早稲田大学出版部 1994年）である。訳者・杉本達夫「解説」によれば、「不合理かつ非人間的な制度因習と過酷な生活条件と、そして人間臭い人物たちとが織りなす作品世界は、現代中国の数多い農村小説の中でも異彩を放っている」（p. 239）。私がこの小説を読んで今日の学生たちのありようを実感したのは、杉本氏の次のような「解説」に該当するところであった——

朱曉平が「プロレタリア文化大革命の時にその下放先として」移り住んだ「桑樹坪」は、あるいはとくに貧しい地域であったのかもしれない（とくに貧しい地域は、全国至るところにある）。……その地域では一年に季節が五つあるという。春夏秋冬にもう一つ、物乞いの季節が加わるのである。村の外に出て施しを乞うて回らなければ生きてゆけない時期が、毎年のように巡ってくるのである。一年が四季から成ると考えるのは、

食い足りた人間の甘い認識であると朱曉平はいう。「革命の情勢がすばらしい」時期であるだけに、「解放」に踏み碎かれた人びとの悲惨さが、いっそう強く朱曉平の心に焼きついたのであろう。朱曉平は「桑樹坪」に中国の縮図を見、「桑樹坪」を通して中国を発見したと言えるのではあるまいか。

桑樹坪やその周辺を描くとき、悲惨な話がいかにも多い。朱曉平の目はいつも弱者に注がれている。桑樹坪の支配者たる李金斗も、じつは弱者のひとりである。かれの意識はいつも共同体とともにある。狡さも悪どさもいわば共同体を守る武器である。そんな李金斗を含めた共同体の中の、とりわけ弱者の中の弱者に、朱曉平の涙は注がれる。本書でいえば彩芳、恵萍、玉蘭であり、李言、玉志科である。弱者が群居するとき、内部のより弱い者を犠牲に祭り上げて、屈折した心のはけ口とするのはよくある図であり、桑樹坪的世界のより弱い者とは、たいていが女でありよそ者である。女たちの多くはあるいはかねで買われ、あるいは物乞いに来て拾われている。その女たちが彩芳や恵萍を苦しめる先頭に立つ。同情も共感も入る余地はない。男たちも同様である。生存の崖っぷちに立つ身には、その不当さをかえりみるゆとりはない。そして悲劇は人をかえ形をかえてくり返されるのである。

まことに、「弱者が群居するとき、内部のより弱い者を犠牲に祭り上げて、屈折した心のはけ口とするのはよくある図であり……生存の崖っぷちに立つ身には、その不当さをかえりみるゆとりはない」という杉本氏の指摘は鋭い。私が日ごろ学生たちのレポートを読みながらいつも突きつけられるのは、学生たちの間の対立・敵対をどう解釈して投げ返していくのかという点であるから、よけいに先の指摘が身に突きささる。たとえば、前稿で示した一つのレポート、学費や生活費の工面のために忙しくする学生たちの姿に対して「バイトなしで学生生活が困難なのであれば、高校卒業後すぐに働くべきだ……無理して大学に来る必要はないと思います。」この学生は、「学校というのは勉強をするところであり、[バイトで疲れたからといって講義中に]居眠りなどされると周りにも迷惑をかけてしまうので、潔く高卒を受け入れるべきだ」、「ゼミなどでグループで行なう授業など」で「もし、自分がそんな人物と一緒にグループになると、絶対に悪意を向ける……ので、周りに迷惑をかけるのなら、潔く自分から辞めるのが私の考えです。」と言い切る。ここにあるのは、先の「解説」にあったように、まぎれもなく、「より弱い者を犠牲に祭り上げて、屈折した心のはけ口とする……図」そのものである。『縛られた村』を読みつつ、私はこの学生のことを考えていた。私が文学の書評を続けていこうとするのは、こういう背景があつてのことである。

さらに、文学の力についてのコメントを二つ紹介しておきたい。まずは、この春に退官するという、杉山寿美子氏が「内向きになり、自分たちと遠い国の文学を敬遠するようになった学生たちにこんな言葉を残す」（日本経済新聞2015年3月22日「読書 あとがきのあと」）――

「共感できることだけやるのでは、小さな時空に生きる自分を追体験するだけ。自分の世界を開かないと成長はないですよ」

もう一つは、「現在、世界中の人々が社会からの疎外感とか、生きにくさとか、共通する苦しみをかかえて生きている。そして心を慰め、生き延びるための知恵を得ようとして本を手取る。それがどんな時代に何語で書かれたものかなんて、必死で求める者には関係がない。」だからこそ、「外国語で書かれた文学テキストと虚心に向かい合うことで、読書の喜びを奪還する試み」を行なうのだ¹⁰⁾という、都甲幸治『21世紀の世界文学30冊を読む』(新潮社 2012年 p.19, p.12)からのメッセージである――

今日本には、ものすごく息苦しい、希望の見えない社会の中で、それでも自分が存在する価値を見出したい、何か面白いことをやらかしたいと思って、イライラしているやつがたくさんいると思う。僕はそういう人たちに、ほら、地球の裏側でも君に似た人がいて、何かをやり始めているんだよ、ということ伝え続けたい。目の前の現実だけが唯一ではない。他にもいろんな可能性があって、様々な場所でみんな、自分なりに闘っている。だから、絶望することなんてないんだ。世界は君が思っているほど強固ではないし、君は自分で思っているほど無力でもない。

僕はみんなの奥深くで、固く身を縮こまらせている力の存在を信じている。

pp.243～244

私がとにかく学生たちに本を読んでもらいたいと、毎月一冊の課題図書を指定してレポートを出させてきた意図は、まさに上の二人の言うところにあったのだが……。残念なことに、以前にコピペ問題との絡みで展開したように、インターネットを使うことでいまは課題図書を読まずしてレポートが書ける時代になってしまい、これまでのやり方での私の課題の成立余地はなくなってしまった。

10) たとえば、ジョージ・ソーンダーズ『説得の国で』を紹介する「22 バカの帝国」では、「広告を含めたメディアの力によりどんどんとアメリカ社会のバカ化が進行していく。こうした状況をパロディによって半ば批判しながら、同時に自分まで魅せられているのがソーンダーズの面白いところである。」として、具体的に以下のように紹介している (pp.155～156)――

たとえ地球環境を破壊する企業に勤めていようとも「実生活ではちゃんと子供を育てようとしている人ばかりだし、自分たちがやっていることの意味に気づいていないわけでもない。こうした仕事をし続ける巧妙な言い訳を考えたりしているんだ。起きた瞬間『さあ破壊するぞ』なんて誰も言わないよ。『今日は善いことをするぞ!』と言って起きるんだ』……だからこそ、彼の作品はバカたちへの愛に満ちている。批判が冷たいものでないから、読んでいて嬉しくなる。

こんな解説的紹介を読むと、思わずこの本を読みたくなるだろう。まさに言葉の力であり、文学の力である。

9. 次なる課題

もうひとつ、私がいま考えているのは、「競争意識の罍のなかの学生たちの現在」というタイトル（仮題）で、上に紹介した学生たちの数々のレポートを素材にして現代学生事情を労働現場における競争——新自由主義のひとつの特徴である自己責任の現象形態でもある——という視点から論じることである。それによって、学生たちの間にある幻想や縛りからの克服・解放に繋がることを期待している。

すでに本稿第6節でPOSSEによる自己責任論批判を見ている——「自己責任で片づけられてしまうと、議論は封じ込められ、社会の問題が目隠しされてしまう」——が、吉崎祥司『自己責任論をのりこえる——連帯と「社会的責任」の哲学』（学習の友社 2014年）も、これについて次のように分かりやすい説明をしている——

自分が決めたこと、自分が選んだこと、あるいは自分がなすべきことをしなかったことには自分が責任をとる、とらないといけない、といった常識的な自己責任観は、もちろん今までもありました。しかし、けっして望んでいないのに、大量の人びとが「非正規」の仕事にしか就けず、生活の困難や将来の不安を抱えているといったことまでも、まるで一人ひとりの責任であるかのように言いたてる「いわれのない」自己責任論がはびこるようになったのは、じつは日本社会では少し前からのことです。そして、その主唱者は政財界です。つまり、現在の自己責任論は、「自分で決めたことには自分が責任をとる」といった通俗的な理解とはちがって、明白な政治的意図をもった「政策言語」（イデオロギー）です。 「はじめに」

「自己責任論」の機能とは、さしあたり、①競争を当然のこととし、②競争での敗北を自己責任として受容させ（自らの貧困や不遇を納得させ）、③社会的な問題の責任をすべて個人に押しつけ（苦境に立たされた“お前が悪い”）、④しかもそうした押しつけには理由がある（不当なものではない）と人びとに思い込ませることによって、⑤抗議の意思と行動を封殺する（“だまらせる”）、というものでしょう。そのようなものとして、「自己責任論」は、新自由主義的支配の合理化・正当化のためのイデオロギー（支配層の思想形態）であることを本質としている、と言えましょう。ちなみに、「競争」には、切磋琢磨としての、たがいに励まし合いもする「競い合い emulation」と、敗者を貶め、苦痛をもたらし、しばしば憎悪をともなう「蹴落とし competition」との二つが区別されてきましたが、新自由主義が顕彰する「競争」は、まさしく、「肘で押しつけ合う」社会、弱肉強食の野蛮な「蹴落とし」にこそ経済の生命力、そして人間の行動原理を見るものでした。

p. 11

そして、この二つの競争の区別について、次のような注釈がある——

「競争」があたり前であるかのような議論がメディアなどを中心に盛んですが、意図的か無意識か、二つの競争を混同している場合がほとんどです。「競争の二形態」を明確に区別する必要があります。もっとも、4600人が回答した朝日新聞のアンケートで、「競争は好きですか?」という問いに、「はい」としたのが43%、「いいえ」としたのが57%という結果もあり、多くの人びとが競争の二形態について承知していないわけではないとも言えそうですが。

p.11

学生たちのレポートを読んでいると、やはりこうした具体的な説明が必要であることを痛感させられる。たとえば、次のようなレポートである――

貧困や失業は個人の生活態度ではなく産業システムが抱える政府の問題だと書いてあったが、私はこれは違うと感じた。確かにいくら頑張っても働き口はなくスキルアップのできない世の中となってしまった。しかし、これは学生時代頑張っただけでこなかったことに対するしっぺ返しだと思う。学生時代にスキルアップを図り、充実した学生生活を送っていたら、今の多少の働き口は開かれ、まともな生活ができたのではないかと思った。

私も競争社会については大いに賛成です。なぜかという、自分が立てた目標に一人でコツコツ打ち込むより同じ目標を持った人と競い合いながら打ち込むほうが真っ先にその目標に到達すると思ったからです。私は昔からあまり勉強ができませんでした。死に物狂いで頑張っただけで……大学にギリギリ合格しました。それは、同じ目標を持った、競い合える友達がいたからです。友達は残念ながら落ちてしまったのですが、競争できる友達がいたからこそ、いまこの大学に自分がいるのではないかと実感しているので、競争は必要だと私は思います。

私は競争社会のほうが良いと思う。なぜなら、競争をしなければ技術の進歩や個人の成長は見込めないからである。極端な例を挙げると、戦争も競争なのではないだろうか。戦争でも他国に勝とうと競争して軍事開発、その技術が応用され今の社会で使われている。デジカメ、インターネット、カーナビ、コンピューター、チョコレート、レトルトパックなど。競争のない平等で平和な世界なら、これらができなかった可能性があるのである（もちろん、戦争自体は否定的だが）。

私は陸上競技の長距離を専門にしている。この競技はタイムと順位がはっきりと結果に出るところが他のスポーツと比べて特徴的である。この競技で向上するには競争が不可欠だ。毎日の練習をするにもチームメイトが1km多く走ったから自分もあと1km走ろうとするように競い合っていくことが自己の記録を伸ばすために必要だ。大半の人はこのような競争がないとダメになる。しかし例外もあり、一人でコツコツと練習をこなしていけることのできる人もいる。こういう人は本当に強い人だと思う。

私は大学に入って部活に入り、同回生が9人もいた。音楽系の部活で同じパートが3人もいたので競争しあった。その結果、3人が3人ともソロの曲を弾けるようになり、とても良い刺激になった。なので私は競争社会の方に賛成である。しかし、活動していく中で競争だけでなく、お互いの出来ないところを教え合ったり補い合うことで超えられることも多々あったので、一概には競争社会の方がいいとは言えないが、競争がなければ人は成長しないと思うので、どちらかと言えば競争社会に賛成です。

最近、モンスターペアレンツなどという言葉をよく聞くが、ネットや新聞などで見ると¹¹⁾「答えられないテスト問題を出す方がおかしい」「全員が答えられる問題にしろ」「運動会で順位をつけるのはおかしい」などと競争を避けるような発言が多い。かわいい自分の子が嘆く姿は見たくないと考えているのかはわからないが、この考えは自己満足でしかないと感じる。本当に子どもの為を思うのであれば、小さい頃から競争させておくべきだと思う。なぜなら、大人になってから競争する機会が多いからだ。大人になっても仲良しこよしで順位がつかない世界なら小さい頃から競争する必要はないが、現実はそのようではない。小さい時に競争し負けたりするなかで次にどう繋げていくかなど対策や立て直し方を覚えていくのである。子どもが可哀想だからと言って競争する機会を奪うことは逆に子どもを可哀想な目に遭わせているのである。

これだけでも、学生たちの間に浸透している「競争」——新自由主義のひとつの特徴である「自己責任」の現象形態——という意識の強固さが想像できるであろう。

そして、こうした状況をマスコミは相変わらず強化している。最近では、秋元康／岡藤正弘・異色対談「若者よ、競争を、もっと競争を」（『文藝春秋』2015年5月号）がその典型である。私と同じ団塊の世代である岡藤氏と少し下の秋元氏が恥ずかしげもなく煽り立てる——「日本から……競争する文化が失われつつあります」・「最後はどうしても根性の勝負になるんです。成功するまでとことんやり抜くという根性はやっぱり大事なんだと思いますね」（岡藤）、「若い人には、もっとハングリー精神を持って欲しい」・「今の日本の若者に一番欠けているのは、何が何でも一等賞を取りたいという気持ち。……だから、一等賞を取るためには人が寝ている時に努力しないと駄目だ、あと一ミリ手を伸ばさないと駄目だ、という話を通じない。なぜなら、そもそも勝とうと思っていないから」（秋元）。

もうひとつは、経済学者の大竹文雄氏による「評・又吉直樹著『火花』（文藝春秋）」（毎日新聞2015年5月17日「今週の本棚」）である。「ピース」というコンビのお笑い芸人の又吉氏の本を紹介するにあたって、大竹氏は同書の目的を「競争で淘汰されていくことの意味を考え……市場競争の中で生きていくことの意味を伝えること」と捉えている。そのように捉える背景として、大竹氏の解説が次のように続く——

11) またもや「ネット」である。「ネットや新聞など」と書いているが、じつはネットでしかない。情報としてしか物事を捉えない問題である。

本書をそのように私が読む理由は、私が経済学者だからだというだけではない。2012年から現在まで、又吉氏は私を含む経済学者と「オイコノミア」というテレビ番組に出演してきて、経済学を身につけてきたからだ。

お笑い養成学校の同期約400人の中で16年経った時点で芸人として残っているのは10人程度だという。こうした話を収録の合間に聞いた際に、参加者のインセンティブを引き出す仕組みとして経済学で解釈できると、序列競争理論を説明したことがある。彼がもともとと思っていたことと符合したようだった。競争は参加者にはつらいものでも、優れた漫才を生み出すために必要な仕組みだと腑に落ちたのではないだろうか。

本書の中で、経済学的なメッセージが最もみごとにまとめられているのは、神谷〔先輩芸人〕が徳永〔主人公〕に次のような説明をする場面である。……「もし、世界に漫才師が自分だけやったら、こんなにも頑張ったかなと思う時あんねん」

「同世代で売れるのは一握りかもしれへん。でも、周りと比較されて独自のものを生み出したり、淘汰されたりするわけやろ。この壮大な大会には勝ち負けがちゃんとある。だから面白いねん。でもな、淘汰された奴等の存在って、絶対に無駄じゃないねん。」漫才師が「一組だけしかおらんかったら、絶対にそんな面白くなってないと思うで。だから、一回でも舞台に立った奴は絶対に必要やってん」。

大竹氏は、このように書いたあとに、だから「競争で淘汰された芸人にも意味があるということ、独占の問題点は何かということ、競争で芸の質があがるということを巧みに説明している」と褒めて、「芸人という競争社会を生きてきた著者〔又吉氏〕が形成してきた考え方と経済学の考え方が一致しているのは偶然ではないだろう」と結論する。

それにしても、「もし、世界に漫才師が自分だけやったら、こんなにも頑張ったかなと思う」、つまりは、競争があったから頑張ったんだというんだらうが、あまりにこれは通俗的であろう。その背後にあるのは、人間は他者と競争しないと頑張らないという信仰であるが、それは人間を馬鹿にした話である。かつて本学でも教員に査定を導入しようとしたことがあるが、その時に推進側が持ち出したのがソレであった。だから、そのとき私は、「そういうあなたは査定が導入されていない現在は頑張っていないのですか？ 私は査定のあるなしに関わらずに頑張っているのですが。」と問うたのであった。

さて、そんな世間に生きる若者たちだから、自己責任という意識や競争社会信仰が強いのも仕方ない¹²⁾という一面を認めつつも、それでも、やはり私（たち）は、そうした世間の価値観の問題性を明らかにして、もうひとつの道もあることを若者たちに提示してい

12) こうした世間のプレッシャーを吐露しているレポートもある——「現在の学生も決して勉学を完全に蔑ろにしているわけではないと思っています。しかし、いくら努力していると思っても、世間は努力が足りないだとか、努力していないだとか言います。これでは学生が学ぶ意欲をなくし、無気力になるのもしょうがないのではないかと思います。また……競争社会のことにしても、私は競争が今の社会には必要だと思うし、実際に競争社会の中で生きていくには競争を肯定し続けていかなければ社会に必要とされないのでは、と考えます。」

きたい。それが、大人の仕事でもある。そして、じつは、そうした萌芽は学生たちのなかにも現われ始めている。たとえば、競争社会を信じなければならぬとは思ふものの、いささか酷すぎるのではと疑う気持ちも現われ始めているのである。

たとえば、次のようなレポートがある――

競争社会は大切だということは私も同意見です。競争というものがあるからこそ頑張ろうという気にもなれ、自己の向上にもつながっているのだと思います。現在の社会もそれらがあつたからこそ成り立っているのだと思います。

しかし、競争社会というものは確かに大切だとは思いますが、あまりにも過激なのではないかと思ひます。確かに比較する相手がいれば自分も頑張ろうという気持ちになり、自己の向上には最適かもしれません。しかし、それを学生に求めすぎなのではないだろうか、と思ひました。

そう、どこに基準を置くのか曖昧だからこそ成り立っている概念ならば、一度根本から疑つてかかることから始めるのも一つの方法なのである。

あるいは、次のようなレポートもある――

資本主義において得や損をする人が出るのは当たり前だろう。だからといって、誰かが特別不幸になったり、人権が脅かされたりするのは、やはり間違つたことだ。競争はいいことだけど、それでも他人の人権は無視をしてはいけぬ。ただ競争するだけじゃなくて、他人のことも考える必要があるだろう。

こういったレポートを読むと、若い人たちのなかにも競争至上主義への批判というか、そうではないもうひとつのありようを求める芽を見ることが出来る。

といって、なかなかこうした疑問は育ちにくい。すでに示したように、世間やマスコミからのプレッシャーやプロパガンダが凄まじいからである。

最後に、そんな揺らぎの中にいる学生たちのレポートをいくつか紹介しておこう――

私は奨学金を借りて大学に入学しました。奨学金の制度がなければ大学に進学することはできませんでした。私の場合は実家暮らしなので、バイト代を家に納めているわけではないが、留学をしたいという思いと奨学金の返済のためにバイトをしています。朝にバイトに行つてから学校に行くこともあります。私だけが大変だと思ひましたが、論文を読んで、自分よりも大変な学生がたくさんいると思ひました。そして、頑張ろうと思ひました。

もう一つ共感したことは、競争することによって負けたくないという感情が生まれ欲が出ると思ひます。なので、人と競争することや比べたりすることは良くないことだと最近は言われているけど、少しは必要だと思ひます。

格差社会や競争社会という言葉は私はあまり好きではありません。特に競争は大嫌いです。しかし、競争社会がなければインターネットなど便利な機器も開発されていなかったと考えると、競争社会は大事だと考えました。……競争社会のおかげで今の豊かな生活があると考えました。

私自身は仕事とはどういうものなのかを考えることがあまりないので、この論文[池野「日本型経営と保険——学生たちのレポートより——」本誌第44巻第1号 1993年5月]を読んだことは良い機会になりました。

この論文の掲載年が1993年で、22年前の論文ということもあって、だいぶ今とはかけ離れた内容を予想していました。しかし、蓋を開けてみたら、そんなこともなく、今年論文として出したとしても特に問題ない内容だったと思います。……

上記のように思うのも、当時の学生たちのレポートの内容が、今の社会現状とそのままのように思えてしまうからです。「自主的なサービス残業」「めんどくさい（責任など）」など、今日の社会人、はたまた学生ですら、そのような状況にいと、私は感じます。

私は、社会は「弱肉強食」の世界と割り切って考えているので、レポートの内容で悲観的に書かれているところでも、「それが仕事をすることでしょ」という感想にとどまっています。……論文にたびたび出てくるキーワードで気になるのが、「実力さえあれば上にいける」という考え方です。私は、その考えに大いに賛同します。しかし、その考えがどうやって形成されたのか考えたこともなく、いつの間にか私の中に存在していたのでした。ここに日本型経営のイデオロギーの強さを感じます。それほど日本人はこの考えに浸食されているのだと思います。私も中学・高校と●●部に所属しており、長い間競争の世界に身を投じていました。その競争が当たり前であり、「実力＝勝ち（昇進）」という構図に疑いをかけることなど考えもしませんでした。しかし、「努力＝勝ち（昇進）」という構図はまず成立しません。論文にもあるように、上にいけばいくほど道は狭くなり厳しいものになるのですから、いくら努力してもダメなものはダメで終わってしまいます。そのなかで「頑張っているのに可哀想」「見る目がない」などの同情の感情は芽生えることすらないです。……まとめると、私自身は日本型経営のイデオロギーに関して疑いをかけて深く考えていこうという気にはならないです。なので、この保険論の講義で当たり前を当たり前で終わらせない力を養いたいと思います。

また、今度、父に会う機会があれば仕事について聞いてみたいと思いました。